

観測・通信・データ処理の新しい技術が開発され、それが充分経済的で信頼できることが判り次第、次々にWWWに導入されるものである。したがってWWW計画は、二つの大きな流れから成る。この二つは平行して継続的に行われるものである。

第1の流れは、1968年から1971年の間に、実証済みの技術を既存の国際気象システムに導入することを含む。

第2の流れはWWWの最終の目的を達成するため新技術の開発を含む。これには、Meteorological Servicesで

ルーチン数値天気予報のための大気モデルの開発、気象衛星、水平探測気球、自動海上ブイなどを含む。これらの新技術は1970年代の初期までにルーチン化され、第一の流れに合流することが期待されている。そして1968年から1971年の間の研究面としては主としてGARPを考えているのである。

前項 (a), (b), (c) については、それぞれ詳細な計画が述べられているが、ここでは省略する。

夏季講演会をかえりみて (2)

(第1会場, 前号つづき)

午後後半の3篇の研究発表は内容が充実していたので、蒸し暑さのために参加者が半減したにもかかわらず活発な討論が行なわれ、有意義であった。

大井正一は、梅雨期の日本付近の地上天気図の型と成層圏天気図の特徴との対応づけを試みた。まだ完全にまとまる段階とはいえないようであるが、完成の日が期待される労作である。倉島厚は東アジアの気候を動気候学的に説明するため、これまでの彼の研究をもとにして、季節風の総観モデルを提示した。日本付近の自然季節の推移を理解する上に、便利なすぐれたモデルで、総観気象や天気予報に役立つところが大きい。梅雨期のモデルについて討論が集中したが、具体的な資料によって裏付けられれば解決される問題である。朝倉正は大気大循環の変動と東アジアの気候について、動気候学の立場から解析を試みた。倉島・朝倉の研究は最近の気候学の進歩を示す重要な研究であるが、内容に比べ発表時間が短かすぎたきらいがある。今後の学会の研究発表会の運営を考える上で解決すべき課題の一つであろう。

なお、今回の研究発表全体を通じて、2、3の発表で気付いたことであるが、スライドの図の座標軸の目盛りや単位が落ちているものがあった。また、図には簡単な標題が入っているとよいと思われるものもあった。

(東京管区 河村武)

(第2会場)

外は非常に暑い日であったが理科大学の会場は大きな階段教室で、ひやりとしていた。聴講者は始めは少なかったが、おいおい増え討論のしやすい状態にあった。

研究発表の始めは、水越さん(三重大)等の都市気候であった。ルサフォード最低温度計を使って伊勢、津の両市で得られた資料の解析である。日最低のパターンが

風向によって変化すること(極小部が風下方向にずれる)、極差が風速と逆相関関係にあることが述べられた。風向と天気との関係およびスケールの問題が更に考慮されなければならないとのコメントがあった。

つぎに、館さん(気象庁)が台風(昭和15年から昭和40年までの700余りの台風)の統計結果が示された。わが国に上陸した台風および急速に発達した台風の種々の統計値が細かく提出された。日夜、公報の仕事に従事している著者が現場の要望によって始めた調査結果である。これまで台風についての種々の迷信(台風は夜間上陸しやすいなど)はこれで終止符がうたれるだろう。

小玉さん(理研)達はPPB(Polar Patrol Balloon)なる気球を南極大陸のまわりに浮遊させる計画を発表した。成功を期待したい。藤本さん(高層気象台)は建物の長波放射に及ぼす影響について述べた。気象庁の屋上にGier-Dunkle型の通風式放射計を設置し、場所を変えて付近にある建物の影響を調べたものである。都市気候が大きな問題となっている今日、放射の面からこの問題にメスを入れたのは意義の大きいものがある。

最後に、小倉さん、田中さん(東大海洋研)達の接地層乱流のスペクトルに関する発表があった。エネルギースペクトルに重点がおかれた。理論式と同時に平塚沖の観測で得られたスペクトルが示された。測定精度の問題と事例の少いことなどにより、理論と実測との比較はまだ困難であるように思われた。1台の超音波風速計を上下させて種々の高さのスペクトルを出しそれを比較検討する場合には、場の定常性が問題となる。また風速の鉛直成分を測定するとき、風速計の鉛直保持が大切である。(気象庁 竹内清秀)